

COSMOS集



原賀 瓊子選

「あすなる集」特選

雪の鳴く音

阿部 則子 北海道

雪掻きをするこもなきこの朝の晨起しんきの余裕につくる仏飯
しばれたる朝の雪道あるくたび雪の鳴く音ひさびさに聴く
学校のそはより除雪が始まりて、終りに近付く冬休みなり
雪道のあひだに乾く舗道しきみちにおのづと背筋のびて大股
どか雪は降りに降りけり半日で百二十センチ埋る帯広

タイムスリップ

成田 裕子*青森

豪雪の北の国より関西に飛べば春へのタイムスリップ
雪の朝電車運休飛行機は通常運航 君と会う旅
豪雪の青森空港除雪隊「プロフェッショナル」を体現してる
雪雲を突き抜けるまでの数分間小さな揺れに君思ってる

「レーダーはきつと精巧」キャプテンはきつと優秀「機窓は真白

魚を焼きたり

荻原 栄子 埼玉

夕星と目の合ふ窓に思ひ出づ帰省せし娘の明るき瞳
たつた二合の米を磨ぎつつなつかしむ娘らるし頃のざわめく夕餉
寂しさに似る安らぎに浸りつつ厨にひとり魚を焼きたり
遠つ世のをみなも魚を焼きぬしか素朴な味の旨き塩焼
コーラスの会に知り合ひ図書館にまた会ふ人と友になりたり

歩 き 神

内山 春美*千葉

遊ぶ児ら浮き立ち見ゆる夕ぐれのいちようもみじの木の下明かし
紅葉すればわれに降りくる歩き神家事もそぞろに旅の本線る
晩秋の中山道をゆく旅にしゃしんの母をポッケへおさむ
諏訪の湯の深きにわれは無重力玉じやり踏み入る千人風呂
彫像やレリーフ見つつひたる湯にステンドグラスの光の淡し

音 も な く

谷 真樹*神奈川

音もなく雪は降りだす音もなく心は病むをどうして気づく
信仰もないのに棄教することく山茶花の散る参道をゆく
いさぎよくなるはかなわぬ夕さりの空に誰かのカイトがうかぶ
もうなにも怖くはないが渋谷行き電車がきたのに乗れないでいる
もういいよとつり橋のゆれが眼の奥にみえているのを気づかないふり

齊藤 梢選

白 い 肌 山口 育 子*東京

霜おいて白くかがやくほうれん草陽の光あび甘みをましぬ
みあげれば墨絵のような桜木が肩の力ぬきすこしほほ笑む
手袋のようにはいかぬくつしたの五つの穴に指ゆうどうす
しみのない白い肌した冬大根料理するのめためらうほどに
二人なら小さな声で「福は内」心の中で大声にして

針 供 養 風 間 孝 子 新潟

令和には死語となるやも針供養の謂れを若きら初耳と言ふ
如月は母の好きなき炬燵にて衣繕ひき今日針供養
昆布巻に村上鮭の骨を入れわが手作りの干瓢で結ふ
肺ガンの手術はせぬと言ふ友は会ふは最後となるやも知れぬと
大雪でまとも買ひせりリュック背に号令かけつつ坂道登る

屋 根 雪 星 キ イ 新潟

秋くれば笹いつばいに太白のふかし芋ありし昭和の厨
その昔部活帰りのすきつ腹みたしてくれし太白の芋
寒明けの大雪警報つづく日々ふかくしづかに風邪がはびこる
声あらく「二度とするな」と子が叱る車庫の屋根雪ほりたる爺を
子と孫と「どすん、どつすん」屋根の雪ほりゆく音のリズム調ふ

二人はのんき 清水 由美子*長野

週末は朝餉の片付けしてくるる夫に感謝し出掛ける支度す
「巡礼し何かが変わりましたか？」の直球な問いに少したじろぐ
忽然と消えて見つからないものが近頃あるが二人はのんき
定演日あとふた月に迫りきてベートーヴェンをガチで復習えり
休符後の入り方つかめず楽譜見て何十遍も音源を聴く

寒 茜 森 崎 洋 子*静岡

朱の色に藍がとけゆく寒茜ほころびし梅影絵となりぬ
氷雨ふる立春の朝ほの暗く春の兆しはひとかけらもなし
最強の寒波がいすわり列島の縦半分は白く塗られる
ぶつけても落しても割れず二十年ヤマザキパンのおまけの小皿
窓の辺に二匹の金魚眠りおりマティスの部屋は青と群青

鈴木 竹志選

ヒ ヨ ド リ 岩 館 澄 江*愛知

とりわけのおでんのおたまひるがえしみんなの変な男の話
わからずに黙ってるのかもしかしてぜんぶゼーんぶわかつてるのか
食べ頃を過ぎてしまった柿ひとつ縁側におきヒヨドリをまつ
ヒヨドリの鳴き声ときにかわいくとときに断末魔となるのです
柿の実をたべて汚れたくちばしを枝にすりつけすりつけきれい

茨木のり子氏 小山芳子*愛知

如月は茨木のり子氏逝きし月母逝きし月春恋しき月

縁ありて若きのり子氏の住みし町に半世紀過ごし同じ空見き

のり子氏の見し松林失せたれど空や海の色今も変わらず

のり子氏のレシピで焼かれしチーズケーキ食みて詩を聴く朗読会はも

ケーキ食み詩を聴きおれば気付きぬ今日十六日は母の命日と

尋問 三浪治子 三重

まさかこの私が容疑者 病院に刑事の眼まなこわれを離さず

何を言ひてもわれを見据えて表情を変へない刑事この非常時を

尋問は終はらずつひに怒りが爆発す息戻らざる夫と離され

取り調べ受くる間に看護師は夫の体を淨めくれしや

夜明け前下弦の月に手をふりてラジオ体操のひろばへ向かふ

三 十 年 福本郁子*京都

燃やしたいものを持ち寄りどんど焼き 身軽になつてさあ輪になつて

青缶のニベアクリームすくう指 姉妹がそろいし実家まことの冬

マネキンのコートコートを脱がせ試着する友との買い物ときには楽し

手になじむ木のカウンターで語り合い語り尽くして鬱ふさうすれゆく

ちよつと手を伸ばせば届きそうな過去あの震災から三十年とは

裏 金 市木涼江 和歌山

たばこやおもての道を三毛猫がハンカチ啞うへしづしづと行く

孫に送る「裏金」と書きしお年玉「裏金ありがと」ラインが届く
年齢を気にしながらも勤めをりたまに鯖よみへへへと笑ふ
ヨシ子さんはお茶目な九十九歳で帰り際には「蛍の光」

八つ当り出来る人欲しと思ひつつひとり酒酌む 明日は満月

大野 英子選

一行詩響る 尾花照子*福岡

五位鷲は首をすぼめてききいたり堀のみなもにしみゆく雪を

水落ちの堀のみなものさざんかは油脂をまといてロントをしたり

飛行機をわたし終えたるゆうぞらはスケートリンクのように傷めり

はなたばをかかえた木村庄之助花道すぎて笑顔みせたり

加湿器の蓋をあければあえかなる一行詩響るあけやみの部屋

不安の影 猿渡紀美子 福岡

健診のレントゲンにははつきりと白き影見ゆ不安の影が

CTの冷たく狭きドーム内、機械の動く音のみ響く

結果待つ待合室でバリアはるごとく「痛じゃない！」と念じる

「癌ではない」と医師の言葉に口輪筋ばあつとゆるみ力が抜ける

水仙の白きかたまり枯れ草のなか寒風にゆらゆら揺らぐ

潮風レモン 福田春子 福岡

太陽のごとき珠実の晚白袖リビングの卓にひとつき目守る

晚白袖ちからを込めて剥きゆけば真綿のごとくに包まれねむる

周防灘の潮風レモンの黄の色はアールグレイの紅茶になじむ
カフェラテに描く葉脈崩れゆく唇寄せて吸ふごと飲めば
祇園太鼓打ちゐる像も震ふなり今季最強寒波はふぶき

持て余す午後 酒 井 恵 子*長 崎

病院のおせちにおもう「夫と娘はいまごろどんな食事だろうか」
院内にインフルエンザ発生し面会予約は取り消しとなる
面会の夫淹れくるるコーヒーを飲めなくなつて持て余す午後
中庭のポインセチアは雪かぶりリスの置物しつぽの白し



狩野 一男選 「その二集」特選

ドライフラワー くだう れいん*岩 手

プリンへの行列を見る プリンへと並ぶ純粹さが欲しくなる
それはもう鱗のような街だった熱海にぎっしり海を向く窓
カーテンを開けて月光浴びながら眠ると羽化をしそうになつた
おとこ子を産めるのはいつ 朝の湯のひかりの中に乳房は歪む
ドライフラワーを貰つてすぐ捨てる 腐る花でなければ意味がない

二か月ぶりのわが家の天井ながめつつ夫の寢息の隣で眠る
ハブ 对 策 牧 島 幸 造 鹿見島

巳の年の初めの仕事鶏小屋にハブ対策の硫黄散布す
朝はお茶夕にはお酒をお供へし父母の遺影と語るひととき
凧揚げの景が見えざる冬の日々爺は嘆くよ「時代の流れ」と
フェリーにて和泊わどまり、与論よとろん、本部港もんとぶ八時間かけて孫に会ひたり
沖縄で孫と過とごせし三日間「また頑張ろう」とやる気湧き出る

老いの時間 佐々木 真知子*宮 城

「心にはバンドエイドが貼れない」と泣く男の子いじめられたか
からず鳴き淋しさを呼ぶ雪の日はラインの声に心温もる
昨夜よべの雪おさまりたるが風強く寒さ増しおり立春の朝
スイスより二十年ぶり友来たり涙あふれて言葉にならず
一日の老いの時間は長すぎて日が暮れるまで過去を旅する

福 豆 谷 川 恵 埒 玉
もう春になつてしまつたねと笑ひぱりぱりかりりたる福豆

わりあての豆の数増えたいへんになりつつ食べきる三十八粒
吐く息のしろきまひるま病院へゆく空色の日傘をえらび
紫外線を避けて丸三年経ちぬそろそろ影は伸びただらうか
ひとさじの白桃すくふ 真夏日の母の最後のひとさじも、桃

今を今、 相良 日 和* 神奈川

心かもしれないものを日本語はいつも隠すね 風が冷たい
恋ですと言ってしまえばそれなりに恋となり得る喧騒がある
このにおい好きと言ったのが君だったか私だったか思い出せない
今を今、取っておかなきや、メモ帳のアプリを開く「あ」とだけ打って
好きであることより好きだったことの方が分かりやすくウケる

しやらららら 谷 口 菜 月 神奈川

あの一とが父になつたと知りました梅檀の実はゆれてしやららら
花落ちて萼のみのこる寒椿ゆびを当てればかすかなぬくみ
枯れいろの道ふみしむる足うらにりと音して犬ふぐり咲く
なにゆゑかりユック背負ひて駆けるとき軟体動物めくこのからだ
ああ今日は忘れたいことばかりだな横断歩道をずんずんわたる

小島 なお選

数 分 松下 誠 一* 東京

竹の葉は僕の頭上にこすれあい活力のない冬を奏でる
この空が澄んでいるのが感覚でピンとくる冬 その冬の恋

面会の三十分にはあちゃんは何度かむせて目はひらかない
静脈のくつきりとある祖母の手にみずからの手を淡くかさねる
冬の土手のするどい草に寝そべって日が暮れるのを数分待った

雪 の 夜 柴 崎 昭 代 新潟

雪の夜は「むかしむかし」と始まりぬ祖父語りたる栃の実ころり
風吹けば栃の実落つる夢を見むとんころとんころ終りなき音
子の声が聞こゆるごとし雪の夜は「長生きしてね」と我への言葉
はるかなり祖父も娘も居ぬこの家に屋根雪すべるとどどとすべる
子の編みしセーター着ればじわじわと縄編みの縄心満たさむ

へ ポ 上 野 博 之 富山

「めっちゃいい短歌はリズムよ」マクドにて女生徒トークをちらつと耳にす
咲ききれず白わびすけの散る庭をみてゐるうちに雪をんな来る
この頃は常用眼鏡も「ポ」がぼやけ「ポ」に見えてきて大層うるたふ
眺へた老眼鏡はいつからかダイソーのめがねと入れ替はりたり
部屋ごとにわが御用達よりどりの百円ショップのメガネ 待ち受く

メ ー ル 米 谷 紀代志 石川

反射光を顔半分^{かへしび}に受けとめて坐像のごとく女^{ひと}は動かず
艶失せし爪のことなど打ちよこすメールのなかの小さき悲しみ
「今部屋に誰も居ません」ある午後を秘め事めきてメールが届く
「けり丸」は健康器具なり蹴るたびに老いの怒りが膝に留まれり
蜂起とは蜂の群なり女王蜂膝下を固め君臨をせり

一本けむり 大谷善邦*長野

蕨の雪 吉方明美*広島

冬晴れの土曜のあさの煙突のくゆらす白い一本けむり
窓ぎわの枯れ畑に立つシロサギの一步一步の大きな無音
朝食の場を変えるハト群れをなし冬畑の上に火花きらめく
海原も川面も同じ進みゆくものたちいれば立つのだ波は
かしあかしあと落ち葉しないでこすり合い暖め合つて春待つかしわ

木畑 紀子選

製紙の町 稲田ひとみ 香川

魔 法 高浜莉乃*兵庫

酒のアテ生ハムチーズと海苔ポテチたまにはいいでしょワタシお疲れ
若い日から肌の手入れはしときよと母の言うことしつかりと聞く
ゲットした人生初の美容液浸透してねとほつぺた包む
アイシャドウ筆でさささと撫でて描き鏡の私に魔法をかける
眉毛からリップに至る工程がうまくいった日スマイル増し増し

「あぶないけん」 市場 美佐子*鳥取

さりげなく補聴器カタログ渡されぬシニアグラスを受け取りに来て
結球を待たずにレタス摘み取りぬ葉物の高値に追われ追われて
県外の友のスマホにわが庭の向日葵が咲くストーリートビユー
方言で注意促すエスカレーター「あぶないけん」と言いえてやさし
腰を曲げ深くおじぎし一歳はその母を真似おれいを言いぬ

命が揺れる 安永 徹*熊本

大寒の冷気切り裂く救急車ピーポーに命が揺れる
われ傘寿独り暮らしも二十年柿の皮剥き切れずに出来る
辞書を繰りヒメザンカと名を知りぬ一輪摘みて仏前に置く
駐車場の屋根をカラスが闊歩するドシバシバシリお前が主か
立春を過ぎて夕映えまだ寒しそれでも薔薇は芽吹ききの気配